

平成 9年 9月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

(青梅市駒木町 1-684 TEL0428-23-6859)

## 特別点「地中からのいぶき」を十倍楽しく見る方法

青梅市郷土博物館では今、「地中からのいぶき」と題して、市内各遺跡から発掘された数多くの出土品の中から、選りすぐった優品の特別展をしています。さすが多摩地域で八王子市、町田市、多摩市に次ぐ遺跡の多い青梅市だけあって、大変すばらしく見応えのあるものばかりです。ぜひ一度ご覧いただきたいと思います。

そこで、鑑賞のお役にたてるように、「土器の部分の名称」、「土器の形」、「土器の様式」について簡単に解説しました。見学する際の参考にしていただければ幸いです。

### I. 土器の部分の名称

右の図を見てください。土器の各部のお名称は人間の各部分になぞらえて呼ばれているのがわかりますね。

でも、ここからが何部でここからが何部というようなはっきりした境がある訳ではありません。参考にしてください。

### II. 土器の形

土器には色々な形があり、それぞれの器形に呼び名があります。この名称は、右図のように九等分して考えると分かりやすいと思います。

頸と胴の間のくびれ部分の幅が器全体の幅の三分の二以上のものは「甕」(図1)で、三分の二以下に満たないものは「壺」(図2)です。また鉢形の中で、高さの三分の二のものは「深鉢」(図3)、半分から三分の一に満たないものが「浅鉢」(図4)、三分の一に満たないものが「皿」(図5)です。さらに台の部分が大きく、器全体の高さの三分の一ほどもあるものは高杯(図6)と呼びます。この他重要文化財に指定されている土器のように注ぎ口があるのを「注口土器」(＝土瓶型土器)、口縁部に片口の注ぎ口をもつものは「片口土器」といいます。

しかしこうした分類も厳密にいうとなかなか難しいもので、はっきりしないものもたくさんあります。

### III. 土器の様式

縄文式土器にせよ、弥生式土器にせよ、細かく調べてみると、それらが作られた地域や場所に

よって形や文様に色々違いや特色があります。また、時代によっても様々な様相があります。特に縄文式土器が使われた時代（＝縄文時代）は数千年も続いたのですからなおさらです。そこで各地から発掘される縄文式土器を比較分析し、その間にある相互の関係と系統的な関係を求めていこうと、その目安として作られたのが土器の様式です。

様式名称の多くは、土器を最初に見出した遺跡の地名をとって何々式と名付けています。例えば展示されている縄文式土器の中に「加曽利E式」という様式名のついた土器がありますが、これは千葉市にある加曽利貝塚から出土した土器を標準としてつけられたものです。そして、「E式」というのは加曽利貝塚のE地点（加曽利貝塚は大変大きな遺跡なので、調査段階でA～Eまでの地域区分をしました。）を指しています。「加曽利B式」というものもあります。同じように、「勝坂式」土器は神奈川県相模原市にある勝坂遺跡、「堀之内式」土器は千葉縣市川市の堀之内貝塚から出土したものを標準としてつけられた名称です。

なお、数千年続いた縄文時代は、大きく草創期、早期、中期、後期、晩期の6期に区分することも行われています。

（文責 野村）